



海援隊旗(二匁きの旗)

http://www.ryoma-kinenkan.jp

呉越 GOETU DOSYU 同舟

人物への理解深める

龍馬を語る時、人を見抜く確かな目線と幅広い人脈は誰もが認めるところ。薩長同盟、大政奉還など常識では考えられない難事業をまるでマジックのごとく成し遂げたかのような印象を受ける龍馬だが、それは決して龍馬一人で成ったものではない。理解しあえる仲間がいての成功であった。仲間の残した書画類に、その時代背景がうかがえる。また、それぞれの思い、覚悟も知ることができる。今回の“書画と写真展”は館が所有する書画と共に先日購入した写真アルバムから、関連写真を人物だけでなく風景も加えて展示予定である。

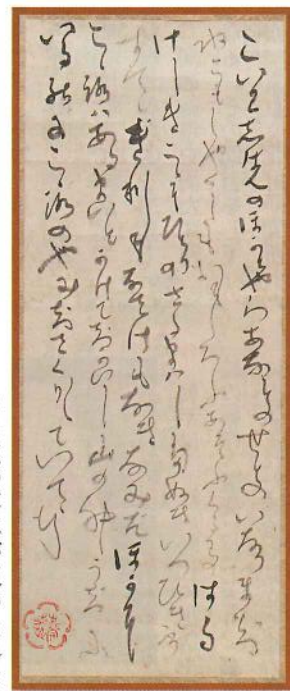
新資料・坂井直常 写真アルバム

今年度、当館は個人から写真アルバムを購入した。1年前から預かっており、調査を進めると同時に、購入予算の調整を行っていた。全部で

館の選りすぐりを
本展では、幕末に活躍した人の中で、龍馬と親交の深かった人々が残した書画を展示する。書画には、その時の思いや人柄が現れる。時代背景を含めて、内容の紹介をしたい。西郷隆盛や勝海舟、山内容堂、後藤象二郎、など当館所蔵の選りすぐりを展示することにしている。例えば、薩長同盟直前の心境を詠んだ木戸孝允の書、篆書により形の違う百個の「寿」を書き並べた小曾根乾堂の「百寿」などは、見応え十分である。

22名の写真のほとんどが複写と考えられ、プロマイド的な物が多い。しかし、岩倉・有栖川宮・

123点の写真が収められたアルバムで、幕末から明治に掛けて活躍した医師・坂井直常所蔵のアルバムと考えている。すべて鶏卵紙の写真アルバムで、内容を4種類に分類できる。当館にとって最も重要なのは、幕末維新期の著名人の写真で、坂本龍馬・岩倉具視・黒田清隆・山県有朋・山内容堂・徳川慶喜・有栖川宮熾仁親王・高杉晋作・三条実美・西郷従道・大久保利通・木戸孝允・福沢諭吉など22名が判明している。中でも龍馬の写真は、三吉家に伝わる写真と同じ構図の物で、少しトリミングが異なる。4年前に長崎歴史文化博物館が、大浦慶のご子孫から購入した物と同じと考えられる。



坂本龍馬俚謡(複製)



坂本龍馬写真

三条などは精度が高く、オリジナルのガラス湿板から紙焼きしたと思われる。おそらく、原板を写真師が持っていて、必要に応じて紙焼きして販売していた物だと考えられる。アルバムの中盤は、外国人ばかりの写真で、ほとんどの写真の下に「Dr某」と記載されているので、外国人医師と思われる。アルバムの後半は明治期前半に撮られた写真が多く貼られている。裏書きから考えて、すべて坂井直常の友人、もしくは弟子の写真と判る。この坂井直常は写真アルバム所蔵者のご先祖にあたり、長崎医学学校2代目校長を務めた人物である。その他、長崎や江戸の風景写真が収められている。本展では、主な幕末維新期の人物写真を書画に合わせて展示することで、それぞれの人物への理解をより深めていただくと考えている。 三浦 夏樹

込められた思いを探る

幕末維新期の書画と写真

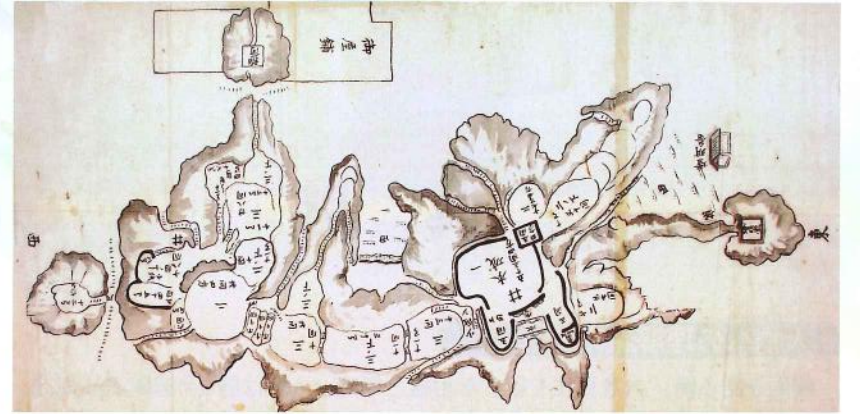
会期 平成26年10月4日(土) ~ 平成27年1月16日(金)



国の重要文化財も展示できる完璧な博物館

リニューアル構想の現状

前号で報告した通り、当館のリニューアル構想は、6月の第5回基本構想検討委員会で、委員の皆様による基本構想の検討が終わった。7月は県民から意見を募集し、それらの意見を取り入れながら7月末に基本構想がまとまった。



「浦戸古城之図」(高知市民図書館蔵)

説明するためにも浦戸城の説明は必要なものである。その上、この浦戸城は、中世から近世への移行期の城として、典型的な特徴を備えており、深く知るほどではないが、天守閣と呼ばれる場所が残っていたり、門に「筋違い」が採用されていたり、堅堀跡が残っていたり、城好きには魅力的な城跡である。こうした事実を知っていただくためにも、リニューアル後の館にぜひ浦戸城の展示は取り入れたい。合わせて、県立歴史民俗資料館で長宗我部の展示をご覧いただくと、土佐の戦国史の理解が深まるはずだ。

県民から頂いた意見で特に私が気に入ったのは、浦戸城の展示を取り入れるべき、というものだった。当館が建っている場所は長宗我部元親が居城としていた浦戸城跡地だが、現在それを説明する展示は無い。これは尤もな意見で、私も以前から必要性を感じていた。土佐の郷土制度は、関ヶ原の戦い後、土佐へ入国した山内家が土着の武士層を家臣団として組織する際に生まれたもので、長宗我部遺臣と山内家の関係を

こうしてまとまった基本構想を持って、9月には文化庁と国立東京文化財研究所に向いた。新館の方は国の重要文化財でも展示できるような完璧な博物館を目指しているため、国の基準を満たす建物が必要となる。その助言をしてくださるのが、東京文化財研究所である。今後、基本設計の段階に入るため、緊密に連絡を取って、間違いない施設作りを目指していく。

三浦 夏樹

10月3日をもって終了

企画展「風刺画にみる幕末社会」展 今までになかった試み、「面白い」と反響も

企画展「風刺画にみる幕末社会」展が、10月3日をもって終了する。戊辰戦争を中心に、世相を風刺した錦絵を読み解いて展示するという、これまで当館ではなかった試みだが、来館者からは「面白い」という感想もいただいている。



展示室より「世の中持寄楽ミ鍋」。右が資料、左が絵解きパネル。

者用の配布資料を作成した。

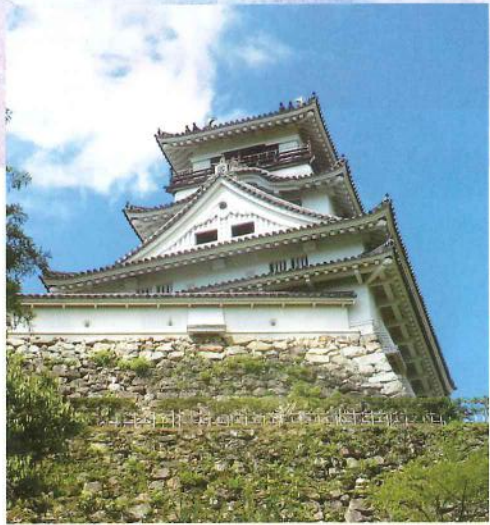
絵解きパネルを作成する上で苦労したのは、難解な符号の解釈であった。芋が薩摩、萩が長州など、符号も分かりやすいものが流布すると、さらに高度なひねりを加えた符号が次々と出現する。読み手を飽きさせない工夫であるが、どうしても読み解けない符号がいくつか残った。江戸の庶民も、本当に全ての絵解きができたのか、謎である。

今回の展示では、龍馬やいろいろな著名人が登場する「幕末史」でなく、同時代を生きた市井の人々の目を通した生の「幕末史」を垣間見ていただくことに主眼を置いた。木版の書籍や錦絵といった出版物に日常的に親しみ、皮肉の利いた風刺画を楽しんでいた幕末の庶民は、とても豊かな文化のなかに身を置いていたと言えるだろう。

亀尾 美香

「坂本乙女のユニークな生きかた」考

高知で坂本龍馬と負けず劣らず有名なのが、龍馬の姉・乙女である。このふたりの性格や気質はさすが姉弟、とても似ていて非常に興味深い。ひょっとすると、乙女の生き方は、女性である分、龍馬より更に独創的で、タフで、厳しく、自由だ。調べていけばいくほど興味をそそられる。



父、兄、龍馬、そして乙女。それぞれが、いろいろな想いを胸に見上げたであろう高知城。

●趣味は地図描き

乙女は、いわゆる大女。当時の一般男性の平均身長が150センチほどだったといわれる時代に、身長約180センチ、体重約100キロという龍馬とさほど変わらない堂々たる体格である。近所の人々から「坂本のはったか(はちきん)」「坂本のお仁王様」と呼ばれた乙女は、まさに土佐の代表的女性のアイコン。「武芸に長じ騎馬弓術水泳等何れもその奥儀を究め、経書を講じ和歌を詠じ画筆に親しみ地図を書き、其他琴三味線一弦琴はもとより舞踊に謡曲に浄瑠璃に琵琶歌に、其芸能の天賦と多趣味は驚嘆に値するものがあった。殊に義太夫を好み、彼女は時々寄席の高座へ上がったが、肩衣を着たる小山の如き肩を上下し、目を閉じ首を振ってサワリをやる所、一代の奇観だったという」(宮地竹峰「傳学岡上菊栄」より)

乙女はそんなじよそこらのはちきんとは別格の女丈夫だった。興味深いのは、趣味が「地図描き」

であったことだ。娘の岡上菊栄の回顧録には、母が部屋中に半紙を何枚もつなぎあわせた土佐や日本、世界の地図を貼ってあったとある。

●乙女のオンリーワン精神

「土佐名婦傳」には、菊栄が語った母のしつけエピソードがたくさん出てくる。食事の私語はいっさい禁止。虚弱体質を改善するため、冬にはあんかを使わず、夏には薄い綿入れを着せ、その上にかたびらを着せるという徹底ぶりである。水泳は竹竿の先に紐をつけて、それを命綱に川で訓練させたという。なるほど、司馬遼太郎の「竜馬がゆく」でもおなじみの乙女のスパルタ教育も、実際に文書で読むと感慨深い。

乙女という人は、間違ったことが大嫌いであったという。しかし、いつも心に余裕がある。融通が利くのである。これは龍馬にも通じている。こんなエピソードもある。

乙女が一弦琴の稽古で遅くなった夜道、鏡川の近くの物陰から彼女を襲おうとした男が飛びだしてきた。

しかし男は、自分より大きい乙女に気づき、慌てて逃げようとしたその瞬間、乙女は、武術に秀でた乙女のこと、そうはいくか男を引っ掴んで軽々と仰向けに倒し、奉行所につき出すと引きずって連れて行くことにした。さすがに男は涙ながらに許しをこうたという。それに対して乙女は、罰として自分を背負って上町の家まで連れて行ったら許すと

言ったそう。このか細い痴漢男は、100キロの巨漢の乙女を死にもぐるいで背負って家まで延々と歩かされたことだ。悪者にも一分の善。そういう人間的な温かみも坂

本姉弟には共通している。

二人は実にたくさん側面を持っている。単純なようで複雑、豪快なようで繊細というふうな、相反する性格が彼らの中にぎゅっと凝縮されている。時代に褪せない輝きを放ち続ける理由は、そこにあるのではないだろうか。

●乙女の結婚と人間関係

乙女は土佐藩の藩医、岡上樹庵と結婚。樹庵は医者でもあり、茶の名手でもあり、山内容堂のお気に入り、の藩医だった。青年時代の容堂は、夜遊びに出かけると必ず樹庵の家に忍びで立ち寄った。「傳学 岡上菊栄」にはこんなことが書かれている。「公は微行の都度、茶道具を袂に入れてこられたそう。そして樹庵夫妻を相手にお茶を立てられ、御殿ではとてもできそうにない下様の世間話に興ぜられて夜遅くまで遊んで行かれた」

容堂と面識もあり、また武市瑞山の妻、富子とも親友だった乙女。脱藩した龍馬の姉であるという事実。乙女は非常に複雑な立場にいる。

乙女は樹庵と結婚したものの、炊事、洗濯、裁縫など、家事はからきし苦手だった。そのため姑にいじめられ、大変苦労したとある。皮肉と罵倒に耐え忍んできた乙女もさすがに堪忍袋の緒が切れ、別居を決意。ふたりの子供を乳母に一任し坂本家に帰る。そこには乙女の並々ならぬ決意があった。

「自分が岡上家を去った後は、二人の子はしかとお前に頼んだよ。然る上はお前も普通の奉公人と思わず、私の代りに岡上家の主婦として一生旦那の面倒を見て貰いたい。お前が

帰縁を勧められる気持ちは嬉しいが、自分の決心の変らぬ限り、此の体で岡上家には帰れぬ。それでも是非帰れとなら、私は此処で自害するから、どうか私の首を持って帰っておくれ」(「傳学 岡上菊栄」より)

乙女と樹庵。長男の赦太郎が病死したときのエピソードは、この夫婦の絆は本当は深かったのだろうと思えるものだ。樹庵は赦太郎を岡上家の先祖代々の墓地である藪野ではなく、高知市外の丹中山に厚葬した。これは藪野の山の中にひとりぼっちでは、寂しがりやの赦太郎が余計に寂しい親心でもあり、また、藪野に参ることができない乙女を思っている樹庵のほからいだったと思う。丹中山には坂本家代々の墓地があった。豪快磊落な乙女が、毎日墓石を抱きしめて号泣したという。

赦太郎の死後数ヶ月間、乙女と樹庵は交代で一晩ずつ墓前で寝ずの番をした。乙女にとって、この時期いかに悲痛な時期だったかわかるのは、彼女の書いた手紙に対して龍馬の返信が残っていることからも推し量ることができる。

それにしても、龍馬の手紙は残っていても乙女が龍馬に宛てた手紙は残っていない。龍馬は書簡の中で、乙女に手紙をくれぐれも手元におかぬよう念を押している。しかし、乙女は龍馬の手紙を捨てることなどできなかつた。そのおかげで、私たちは今、龍馬の生きた筆遣いを、そして人間・龍馬を間近に感じることが出来る。乙女の手紙が残っていたらどんなに素晴らしいだろう……そう思わずにはいられない。

渡辺 瑠海

幕末人物パネルが盛り上げる

写真エピソードをもとにイラスト表現

2回目となる夏休み子ども・龍馬フォーラムは第四小学校の児童四名による校歌の披露からスタート。8月初旬の台風で登校日が中止になり歌の練習ができたなかったそうだが、大きな声で元気よく歌ってくれた。「城もほほえむ文化の園は 坂本龍馬のうまれたところ」の歌詞に、まだ始まったばかりだと言っている。思わずうろつときてしまった。

さて、一つ目の問いかけ「今の世の中は平和だと思いますか」に挙手で回答してもらった後、「その理由は」と続くが、子どもたちは緊張した表情。そんな中で大きな役割を果たしたのが、今回用意した18名の「幕末人物パネル」だった。

今年フォーラムのテーマは「家族と仲間」。出会いの達人と言われる龍馬は、身分、立場、年齢に関わらず、実に様々な人物と出会い、語り合い、さらに自分なりに考え行動した。フォーラムを進めていく中で、話に登場した龍馬ゆかりの人物の写真を舞台上に並べていき、フォーラム終盤には「龍馬はこんなにも多くの仲間や家族に支えられて大仕事を成し遂げました」という締めくくりにしたと考えて。しかし、当時の人物

の写真はもちろんモノクロ。舞台上が暗いイメージになることが考えられた。そこで、元職員川崎真優さんにイラストを依頼。川崎さんは在職中も得意のイラストの腕を振るって、難しい古文書の内容を漫画形式でわかり易く描いたり、当館ショップの人気商品「りょうまかるた」のイラストを描いてくれている。今回は、残されている写真やエピソードを参考に、川崎さんのイメージで18名のイラストを描いてもらった。川崎さん曰く「銀幕スターのプロマイド風になっ



龍馬ゆかりの人物のイラストパネルが舞台上に出揃った

た」というジョン万次郎のイラストなどは、遠い異国の地で語学や航海術などを積極的に学び、多くの事を吸収して日本に帰国し紹介した万次郎がよく表れている。

その人物イラストはあらかじめ舞台上に並べておき、子どもたちや学芸員さんの話の中で人物の名前が出たらめくることができた。パネルの人物が透けて見えてしまわないよう、また、めくるのに手間を取らないように人物を隠す仕掛けは博物館実習生の塩田さん・松浦さんの協力で完成。当日は実習生2名が舞台後ろに控えタイミング良くめくってくれた。

最初は緊張していた子どもたちも、舞台上に並べられているのが龍馬ゆかりの人物だと分かると、他にどんな人物が隠されているのかと積極的に発表できるようにになり、最終的には松平春嶽、日根野弁治など子どもたちの回答では出ないかもしれないと懸念していた人物も含め、18名全員が子どもたちの発表で揃った。

人物パネルというアイテムを使うことで今回のフォーラムがキュッとしまった気がする。来年のフォーラムはどんなアイテムを登場させようか、今からじっくり考えていきたい。

尾崎 由紀

第二回 終戦の日に誓う！ 夏休み子ども・龍馬フォーラム

テーマは 家族と友達

熱く平和と龍馬を語る小学2年生から高校1年生までの18人



竹下龍馬 片岡夕稀 田中里奈 鍋島柚葉 長谷川和希 有澤功凌 坂本楓子

69回目の終戦記念日を迎えた8月の日本列島は、異常気象に見舞われ各地で豪雨の被害が続出、高知も広島も、つらい夏となった。そんな中にもかかわらず、15日の第二回フォーラムには全国から18人の子供たち（小学生9人・中学生8人・高校生1人）が坂本龍馬記念館に集合、世界の平和と実現について思いを語った。フォーラム開始に先立ち、特別ゲストのハワイ・プナホウスクール高等部のひろみピーターソン先生が、広島「原爆の子」のモデルとなった佐々木禎子さんの平和の折り鶴発信活動「サダコ・プロジェクト」を紹介した。続いて郷土



石田 海



阿部 瑠



山内晃司



濱田友里奈



吉村拓也

の後押しでやがてリラックス。言葉に詰まった小学生を、中高生がフォローするなどの場面も。特に、今回から始めた「龍馬との約束2014」パネル作りは子どもたちと学芸員

20年後を想像してください。困難な時代に皆さんが仲間として力を合わせて立ち向かってほしいと思います。発起人は龍馬です。仲間を大事に育てましょう」と締め。前田 由紀 枝



坂本家9代目 坂本登さんは「混乱の時代に、世界の中の日本」という認識で行動していた龍馬精神が今こそ必要な時だとエールを送った。

最初は緊張気味だった子供たちだったが、3人の学芸員らが別室へ移動しての作成となった。その間、会場ではフォーラムに関心を持たれているオカリナ奏者の本谷美加子さんに日本の抒情歌の演奏をお願いしていたが、子供らのパネル作りが熱すぎて時間オーバー、本谷さんが急きょ曲目を増やして対応する事態になるなど盛り上がりがあった。最後に森館長が「18人の皆さんは今日、仲間になりました。フォーラムごとに毎年、20人ほどの仲間が生まれる計算になります。10年後、

2014年度 参加パネリスト (18名)

石田 海	長谷川和希	赤池美穂
鍋島 柚葉	はま田ゆりな	坂本 楓子
片岡 夕稀	田中 里奈	藤原 悠生
阿部 瑠	森岡 瑠璃	藤澤 悠生
山内 晃司	村田 拓也	松本 謙信
竹下 龍馬	大森 聖功	小林 亮介
亀尾 美香	前田 由紀	三浦 夏樹

2014.8.15

が別室へ移動しての作成となった。その間、会場ではフォーラムに関心を持たれているオカリナ奏者の本谷美加子さんに日本の抒情歌の演奏をお願いしていたが、子供らのパネル作りが熱すぎて時間オーバー、本谷さんが急きょ曲目を増やして対応する事態になるなど盛り上がりがあった。最後に森館長が「18人の皆さんは今日、仲間になりました。フォーラムごとに毎年、20人ほどの仲間が生まれる計算になります。10年後、



吉村拓也 大藤聖功 松本謙信 森安琉哉 伊東伸之助 赤池美穂 小林亮介

10、20年後を見据えた仲間作り

資料の保存

学芸員の視点

学芸員資格を取得するにあたり、学生たちが必ず学ぶ「博物館の役割」に次の4つがある。①資料の収集、②資料の保存、③調査・研究、④展示・教育普及である。これはそのまま学芸員の仕事にもあてはまる。人の目にとまりやすい④の展示や普及などのアウトプットは、実は①②③という表に見えない段階を経て成り立つ。どれも学芸員の仕事として重要であるが、資料を永続的に保存し、次世代に受け継ぐという②の役割は、博物館やそこで働く学芸員でしか果たせない最も大切な使命だと考えている。

通常、博物館の収蔵庫は一定の温湿度に管理されるシステムが導入され、資料は堅牢な収蔵庫に適切に保管されればひと安心、と言える。しかし、収蔵庫にあるからといって油断はできない。地震や火災、盗難、紛失、システムの故障虫菌害……想定内外を問わず危険はいっぱいである。あつてはならないことだが、学芸員自身が資料を破損する恐れもなはない。学芸員は緊張感を保ち、常に資料の状態に気を配る必要がある。

初歩的ではあるが、どのような形態の資料であれ、容器のないものはまず容器に入れて保護をはかる。落下や水損、焼損虫菌害、いずれにしても、容器の有無で資料の損傷程度が変わってくる。古文書や薄い書籍などの紙資料は中性紙封筒に入れ、大型の資料は中性紙段ボールの容器に収納する。中性紙には酸化による資料の劣化を遅らせる働きがあり、かつて用いられていた桐箱に比べ、軽くて扱いやすいのも利点である。

資料を寄贈・寄託して下さる方からは、「大事にしてきた資料だから、公の施設(博物館)に預けることができて安心した」という声を聞くことがある。信頼して下さることを嬉しく思う反面、責任の重さを痛感する場面でもある。資料の保存は、こうした期待に誠実に応えることにもつながっている。



中性紙の紙帙(中は書籍資料)。容器は学芸員が手作りする。

亀尾 美香

「ハンドインハンドにチャレンジ」

1,115人でつながろう!

龍馬の誕生日
11月15日にちなんで!!

経済の困難からシェイクハンド龍馬像まで
握手の鎖で心をつなごう!

レッツゴー
ハンドイン
ハンド 2014

11月16日(日)
桂浜に集合

高知県立坂本龍馬記念館
TEL 088-841-0001

レッツゴー！ハンドインハンド2014
26年11月16日開催

時から手筒花火の打ち上げイベントを行う。桂浜のよさこいチーム「桂浜・龍馬プロジェクトぜよ！」の踊りと太鼓が彩りを添える。打ち上げ後の手筒は火薬のにおいが虫（魔）を寄せ付けないことから「魔よけの手筒」として玄関に飾ると縁起がいいとされ人気がある。このため、打ち上げ後は抽選で観覧者の皆さんにプレゼントしている。

そして16日(日)は、おなじみになった「レッツゴー！ハンドインハンド」、館前のシェイクハンド龍馬像から桂浜の龍馬像までの間を人の握手でつなぐイベントである。今年は少し趣向を凝

多彩な11月の挑戦

ことし11月の「龍馬月」坂本龍馬記念館は例年以上に「熱く」なりそうな気配である。なんといっても龍馬の誕生日、11月15日が土曜日で、翌日の日曜日は桂浜の龍馬祭りだ。その日曜の朝は三年目の龍馬像とシェイクハンド龍馬像の間を握手でつなぐ「レッツゴー！ハンドインハンド」龍馬の誕生日11月15日にちなんで1,115人の心と手をつなぐ。

握手の鎖で心をつなごう

今年も「龍馬月間」がやって来る。11月15日(土)は坂本龍馬の誕生日であるとともに、坂本龍馬記念館の開館日でもある。当日は入館無料だ。桂浜では夜7

時から手筒花火の打ち上げイベントを行う。桂浜のよさこいチーム「桂浜・龍馬プロジェクトぜよ！」の踊りと太鼓が彩りを添える。打ち上げ後の手筒は火薬のにおいが虫（魔）を寄せ付けないことから「魔よけの手筒」として玄関に飾ると縁起がいいとされ人気がある。このため、打ち上げ後は抽選で観覧者の皆さんにプレゼントしている。

らした。龍馬の誕生日11月15日をもじって「1115人」の握手の鎖を目標にしてみようというもの。もちろん意味がある。今年は間に合わなかったが、来年は龍馬が世界の海に挑戦しようとしたように「握手の鎖で世界一」にチャレンジしようというもくろみがあるのだ。となると手首を握り合う強い鎖は3000人は必要という。だから、今回は手慣らし。来年の11月15日は日曜日だ。7年に1度というめぐり合わせ、是非参加してほしいのです。



職人がみせる大迫力の手筒花火

濱田 愛華

10月告知「第2回 終戦記念日に誓う！夏休み子ども・龍馬フォーラム」報告展



校歌を歌う第四小学の生徒たち

まるで龍馬の時代“幕末”を想い起こさせるような、日本も国際情勢も不安定な現代。子どもたちは今の世情をどう感じ、「平和」について何を思うのか。

昨年からはじめた「終戦記念日に誓う！夏休み子ども・龍馬フォーラム」。2回目の今年も終戦記念日に、龍馬が大好きな小中高生18人が集い、「家族と友達」をテーマに開催。龍馬の生き方を通して、それぞれの思い、社会に対する意見、夢など、「平和」につな

るものについて語り合いました。

そして最後に18人の子どもたちが誓った「龍馬との約束2014」は、子どもパネリスト達全員の思いをまとめたものです。ゲストのハワイ・プナホウスクール高等部、ひろみピーターソン先生が語った「サダコの折鶴」をめぐる日米の平和活動エピソード、郷土坂本家9代目坂本登さんの激励メッセージ、オカリナ奏者ホンヤミカコさんの演奏等も交えた8月15日終戦記念日のフォーラムの様相をパネルで紹介し

手島 ゆか

会期：2014年10月1日(水)～11月1日(土) 9時～17時
入館料：記念館入館料 一般500円

入館状況

2014年9月20日現在(開館以来8,302日)
◆総入館者数 3,591,786人
◆最多入館 (2010年5月2日) 6,686人
◆最少入館 (2004年10月20日、台風のため) 8人
◆2014年度最多入館(2014年5月4日) 2,668人
◆2014年度最少入館(2014年7月9日) 87人

編集後記

夏場の異常気象に象徴されるかのように、国内だけでなく世界が揺れている現実には冗談ではなく“平成の幕末”を感じている人が多いと思います。それにつけても「飛騰」は今こそ龍馬を発信しなければとの思いで組み立てました。館のリニューアル・別館構想、二つの龍馬像の間を人の手でつなぐハンドインハンドのイベント、終戦記念日の夏休み子ども・龍馬フォーラムなどいつも以上に思いが詰まった仕上がりになったと思います。(モ)
次号から、吉村虎太郎ゆかりの奈良県東吉野村からのリレーエッセイがはじまります。執筆は前教育長・阪本基義さんと、現教育長・峠隆司さんです。お楽しみに。(前田)

館だより“飛騰”第91号(年4回発行)表紙題字：書家 沢田 明子氏
発行日 2014(平成26)年10月1日
発行 高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL (088)841-0001 FAX (088)841-0015
http://www.ryoma-kinenkan.jp
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00～17:00 年中無休
入館料 一般500円・高校生以下無料
身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者1名
高知県・高知市長寿手帳所持者は無料

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、92円切手5枚をお送りください

私のテーマ

科学と創作のあいだ

渋谷 雅之



論文不正

最近生命科学の分野で論文の不正が社会問題化している。論文不正は古代ギリシャ時代から繰り返されてきたことだが、最近の問題の本質は過去の例と同じではない。テレビに登場する科学評論家と称する人々は、この旧くて新しい問題に言及することは少ない。マスコミの騒ぎぶりだけが最大の社会問題だという、いつものパターンである。

私の四十年におよぶ化学研究の駆け出し時代に、データの改竄や論文の捏造をしてはならない、などという指導を受けたことは一度もない。それは、信用を失った紙幣が紙くず同然となった歴史をかえりみるまでもなく、人が水を飲んだり空気を吸って生きていくように、教育や指導にかかわらず誰もが持つ倫理だからである。

先輩から繰り返し教えられたことは、研究の内容は高度に、論文の表現はわかりやすく平易に、ということだった。初心者が最も苦勞するのはこの点であり、実はここに本質的な問題が潜んでいるのである。限られた論文スペースで「わかりやすく平易に」主張するためには、多数の取得データのうち、より良く論旨を説明出来るデータを選び、そうでないものに目をつむる心理が働く。それは論文が研

究資金や地位を獲得するための命綱だからである。その論文に都合の良いデータを選ぼうとする度合が一線を越えると捏造になったり改竄になったりするのだが、一線をどこに引くのかは、個々の科学者の倫理による。それゆえ、思いの外そのハードルは高い。

そして現代は、間違えばやり直せば良いというコンピューター時代の時代である。そうした時代に若者は生まれ、生きていく。コンピューターは人間のしなやかな感性や品格を容赦なく奪う。倫理観のないコンピューターが、いとも簡単に一線を越えようとする場合、人間がパンドラの箱を開ける誘惑に勝つのはそれほど容易なことではないだろう。「見やすくする操作をデータに加えるのは不正ではない」といったことを本気で考えているらしい人種が現れるのは、私たち（老人）が考えるほど異様なことではないのである。

ロボットが意志を持つ時代の到来を目前にして、電算機と人間の折り合い方に言及せず、電算機に振り回されて過ちを犯した若者を責めるのは片落ちというものである。

歴史と小説

科学者のくせに、なぜ歴史の本を書く？という質問を受ける

ことがある。私の中では歴史はこれまでの仕事の延長であり、違った分野に入ったという意識はない。歴史学は人文科学という科学の一分野であり、小説やドラマなど創作の世界とは本質的に異なるからである。

歴史の本を書く場合の資料の引用は、自然科学の場合の実験事実の表記に相当する。歴史資料は原典に作為を加えずに引用するのが基本である。ただし、そのままでは読者が理解し難いことがあるので、原典の内容を変化させない範囲で作為を加えることが多い。たとえば旧漢字を現代漢字に置き換えたり、原資料にない句読点やルビを加えるなどの作為である。そのため、通常は書物の冒頭に「凡例」や「古文書の表記について」などの但し書きを記載し、著者の作為の法則を表明するのである。これら凡例等の記述は極めて重要な部分であり、これを怠ると作為が改竄と名を変えらるることになる。歴史学が発達していなかった時代の著作には、このような改竄はおろか、資料の出所も記されていない著作が実に多かった。

資料の出典を書かない引用や、そもそも根拠を無視した論述は、歴史論文を標榜する限り、作話（捏造）を疑われる覚悟をする必要がある。そうした部分の多い著作は創作の範疇に入っ

てしまうので、後世の歴史家が引用し批判する対象とならず、より正しい歴史が編まれるための貢献を自ら放棄することになる。

一方、歴史小説やドラマなどの創作は、ひとびとに過去の時代を思い起こさせ、楽しみながら現代に生きる人間のありようを考えさせたりするうえで大きな役割を果たしてきた。創作には幅があり、真実に基づく部分が多い創作と少ない創作とでは楽しみ方がおのずと異なる。私自身が前者により大きな迫力を感じるのは、真実を探る歴史学に関わっているからであろう。現在好きな著作で有意義な後半生を過ごせるのも、若いときに「三国志」や「龍馬がゆく」などの創作を読んで心を揺さぶられた経験のためである。特に司馬遼太郎の小説は、その文章力の見事さが、私にもものを書く喜びを教えてくれた。

先人の業績を正當に評価しつつ、誤りを発見すればそれを訂正し、ほんのわずかの新発見を付け加えることを繰り返して、歴史学は進歩する。突飛な推測によって根拠の薄い刺激的な説を唱えるよりも、新しい資料の発見のための地道な努力の積み重ねによって少しずつ進歩する歴史学が、私は好きである。

参考文献：Wブロードバンド著「野賢治の「背信の科学者たち」九八年化学同人

ピースビルダー

(平和を築きあげる人) として生きる

米ハワイ・プナホウスクール高等部教諭

ひろみピーターソンさん



ひろみさんとの出会いは4年前になる。アメリカフォーラム・ハワイ会場プナホウスクールにおいてである。

同校は、170年の歴史を持ち、卒業生に全米のリーダーを多く輩出している名門校。オバマ大統領の出身高校で、在校生たちと「自由・平等・平和、そして命」をともに考えようと、私はハワイ・ホノルルに赴いた。

現地到着後、真っ先に言われたのは「プナホウでのフォーラム開催は不可能だ」ということ。しかし、同校高等部日本語科教諭・ひろみピーターソンさんとの出会いによって、フォーラム開催はむろん、その後の記念館の取り組みまでも大きく動いていった。

8月15日、「終戦の日に誓う・子ども龍馬フォーラム」のゲストとして、平和の折り鶴「サダコ・プロジェクト」の話をしてくれた、ひろみさんにインタビューした。

ハワイから
「子ども龍馬フォーラム」へ

ひろみさん、お久しぶり。1年ぶりですね。

ひろみさんが高知に来るのは4年連続になりました。フォーラムの打ち合わせに始まり、プナホウスクール日本研修の下見と本番、そして、今年「子ども龍馬フォーラム」。ずいぶん中身の濃い高知訪問ばかりですね。

おかげで記念館はハワイだけでなく、広島とのつながりもできて、龍馬発信の大きなヒントもいただきました。本当にありがたいと思っています。

こちらこそ、今年もまた高知に来ることができてうれしいです。

高知には10数年前、日本語の教科書をつくるため、夫と一緒にジョン万次郎の取材で土佐清水を旅行した思い出があります。当時はまさか、こんなに深いおつきあいができるとは夢にも思いませんでした。

万次郎と言えば、私のいるプナホウスクールに来た可能性を調査しているところです。本校は万次郎が救助された年に開校しており、咸臨丸との関係もありそうですよ。

そうですね。ハワイと高知には意外なつながりがありますね。また、アメリカフォーラムの基本理念が、この「子ども龍馬フォーラム」につながっているんですよ。

このようなフォーラムが誕生



サダコの本を手にするひろみさん。左は禎子の兄・佐々木雅弘さん。中央右は、禎子の甥・祐滋さん、右は「アドベンチャー」共著者・大浦ナオミさん=昨年ハワイ・ホノルルで

は可愛い孫娘である私の夫に会うことを拒否しました。自分の夫を原爆で、長男をフィリピン戦で失っているからです。

授業や教科書作りの中で、生徒たち、つまり四世五世の子どもたちに自分の祖父母の体験を聞き取りさせてきました。気づいたのは、被爆地である日本は被害者だというだけでなく、加害者でもあったということです。

私の父は中国で戦争し、亡くなった叔父はフィリピンで戦死しました。私の生徒には中国系もフィリピン系もいます。被害に遭った国で父や叔父が何もしなかったとは言いきれませんが、だから生徒たちに広島を見て、戦争に対する自分自身の考えや意見を持ってもらいたいと「広島平和スカラシップ」を始めたのです。

出会いが新たな広がりへ

大変なご苦労もあったと思いますが、私は「広島平和スカラシップ」の交流校、広島女学院高校の真剣な取り組みにも驚きました。

人の出会いは不思議なものです。記念館のフォーラムも思いがけないことでしたが、広島女学院理事長・黒瀬真一郎先生との出会いが「広島平和スカラシップ」の土台となりました。

広島女学院高校がスカラシップ生の受け入れに協力してくださり、

平和学習の交流が生まれました。日米2校から始まった交流会は、広島県内をはじめ韓国、ヨーロッパの高校生も参加して、本格的な平和フォーラムへと発展しています。

毎年原爆の日の翌日、生徒たちの取り組み発表と、ゲストによるスピーチが行われています。

私が初めて参加したとき、日本を加害国被害国として学び、核兵器廃絶の署名活動をしている広島女学院高校生がゲストスピーカー、ダニエル・トルーマンさんに「あなたはあの原爆投下を正しかったと思いますか」と質問しました。ダニエルさんは、原爆投下を指示した米国トルーマン大統領のお孫さんです。鳥肌が立ちました。

ダニエルさんは広島に来る前、

し、毎年開催されることは、本当に大事ですね。子どもたちが真剣に平和や社会について話し合うだけでも意義がありますよ。私も今回、長年関わってきたことを伝える機会をいただき、ありがたいです。

26年かけた日本語の教科書作り

ひろみさんは今年6月、30年間立ったプナホウスクールの教壇を下りられた。お疲れ様でした。

そうですね。30年間プナホウスクール教員として働き、素晴らしい生徒たちとの出会い、ドラマがありました。教えることから今はリタイアしましたが、私は今とても充足した気持ちです。私は同僚と一緒に、26年間かけて「アドベンチャー日本語」(5巻)という日本語の教科書を出版しました。既存の教科書

では教育効果が得られず、独自に作成したものです。成果は上がり、今では全米50%以上の日本語教科書として使われています。

その著作権料は全て学校に寄付し、「アドベンチャー日本語基金」を設立しました。6年前からは「広島平和スカラシップ」として生徒らを広島に派遣し、平和教育を続けています。おかげで、3,500人いるプナホウスクールの生で広島を知らない人はいません。

「アドベンチャー」にはひろみさんのふるさと広島への思いも込められていますね。中には読み物として、ご家族の被爆体験も出てきます。

私は戦後生まれの被爆二世です。祖父は被爆後1週間、母と上の姉が後年白血病で亡くなりました。2番目の姉は20年前から、兄も最近発症した膠原病で苦しんでいます。すべて原爆症です。原爆は過去の話ではありません。

私はハワイでアメリカ人の夫と出会って結婚しました。祖母

原爆症で亡くなった佐々木禎子さんのお兄さんの佐々木雅弘さんに出会いました。禎子さんは「原爆の子の像」のモデルで、雅弘さんは禎子さんの思いを伝える平和活動をされています。

ダニエルさんは来日に際し、佐々木さんと話し合っこの質問には答えられないことになったということです。それは互いが非難し合っている限り平和は築けません。許すこと認め合うことから平和は生まれるのです。

アメリカでは原爆によって大戦を終わらせることができた。日本では核兵器の被害国だ、と言う。しかし、お互いを非難し合っている限り平和は築けません。許すこと認め合うことから平和は生まれるのです。

“ピースビルダー”としての使命

ひろみさんの中にある熱い思いが伝わってきます。生徒たちともに長年真剣に向き合って来られたのですものね。

私は渡米して40年余り。両親が亡くなった時に故郷がなくなつたように感じました。今でははつきりと日系人だという自覚があります。ハワイが私のいる場所であり、ここにいる意義を感じています。

昨年、禎子さん(サダコ)の



折った折り鶴が日本軍の奇襲攻撃によって日米開戦の地となったハワイ・パールハーバー記念館に寄贈展示されることになりました。

これまで「リメンバー・パールハーバー」「ノーモア・ヒロシマ」と非難し合ってきた日米の関係に終止符を打ち、サダコの小さな折り鶴が平和と和解のシンボルとなったのです。ダニエルさんと雅弘さんの出会いから起こったことです。広島出身の私には奇跡だと思ひ、涙が出ました。

教師として生きてきたこれらの私のミッション(使命)は、「ピースビルダー(平和を築く人)」を育てること。「広島平和スカラシップ」を通じて、平和の大切さを伝え続けます。

ひろみピーターソン profile

1948年広島市生まれ。京都外語大学英米科、ハワイ大学教育学部卒業。広島高校で英語教師を1年務めた後、渡米。ハワイのメリノール高校で4年、プナホウスクール高等部で30年、日本語教師を務めた。書道8段、号は「東花」。

「アドベンチャー日本語基金」創設者。資金は総額1億円を越している。

ハワイ州外国語教師賞、全米日本語教師賞、北米書道展外務大臣賞など受賞。夫ウエス・ピーターソン氏(故人)は、ハワイ大学情報工学部教授で、「日本国際賞」受賞者。



インタビュー
前田 由紀枝
(まえだ ゆきえ)
現代龍馬学会理事
高知県立坂本龍馬
記念館学芸主任

「墨消しの真実」

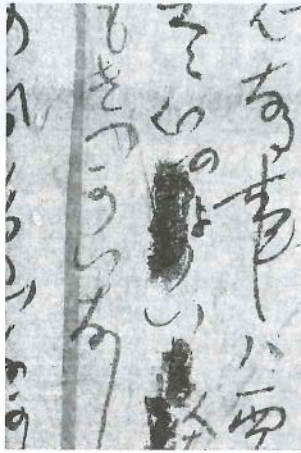
宮川 禎一

龍馬の手紙にはときどき墨でグジュグジュと字を消して横に訂正記載した部分が見られる。単に書き間違えただけで、特に深い意味があるわけでもなさそうだが、家族への手紙なら許される訂正であろう。

しかしながら一箇所だけちよつと気になる訂正がある。慶応二年十二月四日付けの姉乙女あての一通だ(京博蔵・重文)。

この手紙の後半部に薩摩の西郷吉之助の事が書いてある。龍馬は西郷を評して「大いに心のよい人なれば」(妻おりょうを預けても安心だ)という一節である。ここに墨消し訂正があるのだ。「心■い」の右横に「のよ」の二文字を入れている。この墨消しの下に元は何と書いてあったのか気にならないだろうか。龍馬は西郷のことを最初

にいったいどう表現しようとしたのか。そこでこの手紙にバックライトをあてて写真を撮影し「心■い」の墨消しの下に何と書いて



龍馬墨消しの手紙

てあったかを読もうとした。それが写真である。なにやらひらがなの「あ」と「か」のようである。「か」ははっきりしない。それを前提に「心あかい人」であったならばどのような意味かを調べてみた。「赤心」とは辞書では「まごころ・誠意」とあるので「心あかい人」は西郷の人格を表すのに相応しいようにも思える。しかし「心あかい人」という表現を見た覚えが乏しい。龍馬が「心あかい人」をやめて「心のよい人」に訂正したのもあまり使われない表現だからではなからうか。憶測を重ねたが龍馬の西郷への人物評なので注意すべき一節だ。あるいはやはり意味のない書き間違いなのだろうか。皆様の御意見を乞う。

コラム・龍馬のこと

「志という龍馬のバトン」

高知市立一ツ橋小学校 校長 川崎 弘佳

1970年(昭和45年)の春、高知市の初月小学校の古い講堂で6年生だった私は古老の話涙をこらえながら聴いていた。それは坂本龍馬の話だった。古老は当時でも60歳をこえていたと思うので、生まれは1900年代の初め頃か。もしかしたら、その古老は自分の親たちから龍馬のことを聞いていたのかもしれない。そう思うくらい情景が目浮かんでくるような話だった。

古老は龍馬暗殺の近江屋の話をした。私の目の前で龍馬は額から血を飛ばしながら息絶えたように感じた。聴いているだけに血生臭く、息苦しかった。「何で! どうして!」と、まだ幕末のことなど十分に理解できていない6年生であっても、その時代に龍馬を失ったことの無念さが胸をかきむしっていた。

やがて、古老の話が終わる頃、少し落ちついたらこう思っていた。「龍馬のおかげで新しい時代が来た。もっと知りたい龍馬を。自分も何か役に立つ人になりたい」と。龍馬の生き方は勇気を与えてくれた。

それから数十年たち、私は小学校の教職についた。6年生を受け持ったら、龍馬の授業をおこなった。あの時、私は志という龍馬のバトンを受け取っていたのだ。

さあ、今度は私たちの番である。未来の子どもたちに、何としてもこのバトンを引き継がなければならない。この思いは坂本龍馬記念館も同じであろう。これは一人でできるものではない。教師仲間や記念館と連携して、どの先生も龍馬の授業ができるような教材づくりを試行錯誤しているところだ。

難しいと言われる幕末の歴史。郷土の偉大な先人から学ぶことは多い。坂本龍馬に取り組める教師を一人でも増やして、次の世代の子どもたちへ志という龍馬のバトンを確かにつなぎたい。

“話してみるかよ”

「才谷屋と龍馬と商売」

才谷屋子孫 坂本 英穂

母が他界して何年目だったか。恒例で高知市山ノ端へ墓参りに行った。墓所へ昇る小さな坂道のとば口に、見慣れぬ小さな標識めいたものが目に入った。「才谷屋の墓70m先」と記載されている。これは私の家の墓所のことを指している。誰がいつのまにこんなものをぶら下げたのかと不審に思いとまどったことを覚えている。後日判ったが、高知市立「龍馬の生まれたまち記念館」が開館し、その際高知市内の龍馬に関係する道標として設置された「龍馬を育てた道:道しるべ」の一つだということ。

南国市才谷の坂本家初代「太郎五郎」から数えて4代目「守之」が高知の城下に開業した「才谷屋」。「才谷屋」3代目(坂本家6代目)「直益」が郷土坂本家を分家させ、その末裔として龍馬が誕生する。そして龍馬の活躍の背景には土佐の豪商「才谷屋」の存在が見え隠れしている。平民でも現代に通じる商売に通暁した才谷屋の営みは、高知城下の環境とあいまって、当時の身分差別とは違う価値観を持った龍馬を育てたのではないだろうか。

坂本家本家才谷屋の子孫であると父から聞かされ続けてきた私にとって、龍馬の幕末での活動は、世界を相手に商売をしようとした土台創りであったという気がしてならない。

私の中での「商売」という言葉が意味するものは世界共通で、信頼の上に成り立つものであると思う。決して銭儲けだけ、マネーゲームだけではなく、価値あるものを交換する行為だと認識している。生活を支える為の仕事には辛いこともあるが、その根底に「商売」を意識した時、その延長には龍馬が夢見たような世界とのつながり、人とのつながりがあるように思う。そうして勤めに精を出す毎日である。